小島直記伝記文学全集

島崎藤村記念文学全集

第三巻

中央公論社

小島直記伝記文学全集　第三巻
定価　三四〇〇円
昭和六十一年十二月十日印刷
昭和六十一年十二月二十日発行
著者　小島直記
発行者　嶋中鵬二
印刷者　小林　清
発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二ノ八ノ七
振替　東京二―三四
©一九八六　検印廃止
ISBN4-12-402583-1

小島直記伝記文学全集　第三巻　目次

日本さらりーまん外史

坂本竜馬　転身あざやかな近代人　13
小栗忠順　日仏合弁会社のプランナー　17
海援隊　冗費節約で隊士の不興を買う　21
岩崎弥太郎　幕末を飲み明かした〝社用〟ぶり　25
渋沢栄一　攘夷派から合本主義者へ　29
大隈と渋沢　〝変節〟に終止符を打った渋沢　33
広瀬宰平　外人を雇った先見の明　37
益田孝　騎兵隊長から横浜の商人に　41
三井物産　無資本会社の誕生　45
福沢諭吉　人材養成の大先達　49
荘田平五郎　三菱で名をあげたスペシャリスト　53

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

山本条太郎　真剣勝負に〝学歴〟無用　57
田口卯吉　〝必殺〟のペンの力　61
犬養　毅　博学な御用記者　65
古島一雄＊　無私一念の言論人　69
三野村利左衛門　無学の非凡人　73
伊庭貞剛　住友の一大ピンチを救う　77
中上川彦次郎　時流をぬくタレント　81
三井銀行　ホワイトカラーを大量起用　85
朝吹英二　有為転変の人情家　89
藤山雷太　中上川に抜擢されたキレ者　93
中上川流　スジを通し妥協を排す　97
藤原銀次郎　鼻ひげの新米社員　101
中上川と藤原　〝責任はオレがとるからやれ！〟　105
藤原と朝吹　革新の妙手・藤原青年　109
藤原と児玉　台湾開発で総督にスジ通す　113

益田の説得　118
意気に感じた藤原

藤原と柳田国男　122
対照的な樺太旅行

大川平三郎　126
身につけた独学心

渋沢と大川　130
運命ひらく建白書

浅野と大川　134
セメント王と製紙王との〝奇縁〟

藤山と大川　138
雷太、王子製紙に乗り込む

大川と浅野　142
大川の才幹を見抜く

中上川の死　146
益田派の勢力台頭

藤原と王子製紙　150
厄年にボロ会社を引き受ける

小林一三＊　154
文学かビジネスか

川田順　158
文学よりビジネス選ぶ

二六新報事件　162
小林の手柄もアダ

上司と部下　166
「人を知る明」と運命

鈴木馬左也　170
身をもって人材を発掘

池田成彬　174
仕事をしないエリート

武藤山治　ナポレオンを崇拝　178
結婚　打算や功利を排した人たち　182
鈴久事件　武藤山治温情の勝利　186
入社異聞　あえてコネ就職を排す　190
尾崎紅葉　〝金権時代〟の幕あけ　194
幸田露伴　ハタチ前に〝だんな〟と呼ばれる　199
二葉亭四迷　破れた実業への志　203
お鯉　新橋に咲く名花　207
桂太郎　〝探美の道〟ひと筋　211
日糖事件　明治の〝黒い霧〟事件　215
小林一三＊＊　銀行員から日本の小林へ　219
小倉正恒　役人にイヤ気がさして住友へ　223
各務鎌吉　秀才で〝異例の大物〟　227
頼朝丸　左遷を学びの場に　231
團琢磨　技術系経営者として登場　235

洋行みやげ　〝鉱山、それが人生〟　239
原田二郎　贈答の達人　243
バトンタッチ　批判受ける〝長居〟　247
湯川寛吉　人知れず善をなすひと　251
引退者たち　みごとな引きぎわ　255
父と子　実業家より僧侶に　259
古島一雄＊＊　碁の打ち方で人を見る　263
致富の道　常識破って成功した大川・藤原の例　267
不良外人　内閣を倒したリヒテル　271
コネクション　協調経済のアダ花　275
事件の余波　住友の〝蕭何〟伊庭　279
内田信也　命がけの大バクチ　283
天国と地獄　はでな〝にわか成金〟　287
ある青春　戸隠山で合宿生活　291
大川周明　上海に密航して北一輝と会う　295

北一輝　不可解な二面生活　299
訣別　短かった北・大川の友情　303
竹馬の友　思想と行動を越えたきずな　307
中野と啄木　右と左に別れ行く　311
めぐりあい　運命のいたずら　315
会社記事　批判の矢を東電に　319
変身　自己形成への歩み　323
旅人たち　河上、近衛にも薫陶　327
河上と武藤　カチンときた武藤　331
櫛田民蔵　教授の地位も捨て　335
高田と安部　真実、あくまで追究　339
サラリーマン・ユニオン　生活難で増俸運動　343
掠（りゃく）　いばって寄付強要　347
朝日平吾　暗殺の幕を開く　351
学友　一転、はげしい競争　355

久村清太　ビスコースに到達　359
秦逸三　人絹研究に生きる　363
各務と平生　三十年の協力さらば　367
庇護者たち　〝負け犬に涙〟の川田　371
大小論　大樹にも危険あり　375
一城の主　「道をきわめる努力」　379
勘定　〝社長より自営主に〟　383
政治路線　議会史に残る武藤　387
課長　満鉄社員のバックボーン　391
一期　全身障害克服して　395
事務所長　無私無欲、憂国の士　400
谷間　戦時体制のウズに　404
ハガキ　生への賛歌わかつ　408
あとがき　412

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

小島直記伝記文学全集

第三巻

日本さらりーまん外史

日本さらりーまん外史

坂本竜馬　転身あざやかな近代人

——日本サラリーマンの大先輩——

サラリーマンというのは、BGと同様に和製〈英語〉だという。けれども外国語の語感も、違和感もなく日常的に用いられていてすでに〈日本語〉という方がふさわしく、それを無理に直訳することはないわけだが、一応言い直してみると、サラリーとは俸給のことだから、サラリーマンすなわち俸給をとる男ということになろう。そうなると、金の代わりに米という現物給与ではあったとしても、主君につかえて禄をもらっていたサムライたちは、サラリーマンの大先輩だということになる。

しかしサムライというのは、職業的要素よりも身分的要素が強かった。しかも槍一筋でお召しかかえになった創業者型、あるいは異例の抜擢ないしは謀叛によって高い地位についた連中は別として、大半のものは《家来》としての地位を先祖代々世襲するのが常道だったから、もともと就職先の自由選択を前提とし、可能性としては能力次第でトップに昇進できるし、あるいは逆に気にくわねばやめてほかにいくこともできるサラリーマンの先輩とするには、ちょっとぐあいがわるそうである。

だからここに日本サラリーマンの大先輩として坂本竜馬をあげるとなると、彼は土佐藩士じゃなかったか、と異論も出そうである。そこで大急ぎで結論から先に書かねばならないが、まずはそのキャリアにおいてどう否定しようもなくサラリーマンと血縁があるからであり、さらにはその人柄・思想の点で、どうしても大先輩として祭り上げたい魅力の持ち主は彼しかいないのだ。

土佐藩士とはいっても一般武士よりは低く見られた郷士の二男坊。三代前までは酒造業で、金がたまって郷士の株を買っただけのこと、どうしようもない制約でがんじがらめにされてきた代代の純潔サムライとは毛並みがちがっていた。泣き虫、寝小便たれ、ものおぼえがわるくて寺子屋から断わられた低能児。それがやたらに剣術がうまいとわかって、江戸の千葉道場に修業にやられ、腕前も上がったが流行の攘夷思想にかぶれて、開港論の元凶とみられた勝海舟を斬りに行った。「私を殺しにきたのだろう。それもよかろうが、一応こちらの意見を聞いてからでもおそくはなかろう」と勝は言い、竜馬もじっくりと話を聞いてやる。

昭和七年五月十五日、ときの首相犬養毅は乱入した青年士官たちに向かって「話せばわかる」と言ったが「問答無用」とピストルで射殺された。勝海舟のように刺客を押えきれなかったところに犬養の器量不足を見るべきか、竜馬のように話を聞いてやらなかったところに青年士官たちの浅見短慮を見るべきか、正確なことはわからないが、ただ一つはっきりしていることは、話を聞いたあとの竜馬の転身のあざやかさである。

実地見聞にもとづく世界の大勢、それにくらべての日本の後進性、開港修交による未来のビジョンなど、勝の意見に感心すると、ただちにその場で門弟を志願した。このこだわりのなさは、世評や俗見にたよらず、あくまでも自分の肉眼ですべてを見ようとした態度なればこそ。これだけでも当時の公式的、図式的頑固サムライには見られぬ新しい人間のタイプであった。勝の指導下に神戸海軍所で海事訓練をうけながら師の人間を学ぶ。

「不逞の徒を養成した」という口実のもとに勝が失脚させられると、長崎に「亀山社中」というブローカー的営利機関をつくって自活の道を講じ、国事に奔走する。社中すなわち社員は二十数名。そのなかの近藤長次郎はまんじゅう屋のせがれであり、長岡謙吉は医者のむすこ、新宮馬之

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com